

鹿児島の植物 68

植物の利用

植物担当 久保 紘史郎

鹿児島には多様な生態系があり、そこで暮らす人々は祭りや風習、日常の生活に、様々な植物を利用してきました。その例を紹介します。

ハゼノキ（ウルシ科）と和ろうそく

ハゼノキの実には蠟（ろう）の成分が含まれています。この成分を抽出して作るのが和ろうそくです。江戸時代後期の薩摩藩では生産が奨励されていました。和ろうそくは、現在ではあまり使用されなくなりましたが、栽培されていた頃の名残で、県内各地にハゼノキは見られます。



ハゼノキ



和ろうそく

スダジイ（ブナ科）と白炭

明治期の近代産業育成事業（集成館事業）を進めるために、スダジイ等から作られた白炭（火力の強い木炭）が大量に生産されました。白炭は反射炉などで用いられ、鉄を溶かして大砲を作るなど、重要な燃料として用いられました。



スダジイ



白炭

シャリンバイ（バラ科）と大島紬

大島紬に利用されている泥染めには、地元でテーチギと呼ばれるシャリンバイの木を使用します。シャリンバイの材を煮出した汁と泥で数十回染めることで、絹糸が独特の風合いを持つ黒色に染まります。この色はシャリンバイに含まれるタンニン等と泥に含まれる鉄分の化学反応によるものです。



シャリンバイ



大島紬

悪石島の植物を利用する仮面神ボゼ

悪石島のボゼは、先祖の霊とともに集落に集まってくる悪霊を、追い払ってくれると言われてしています。

ボゼは、リュウキュウチクの骨組みで作られた仮面を着け、ビロウの葉やシュロの皮を身にまとっています。手に持ったボゼマラという棒は、タブノキで作られています。

国の重要無形民俗文化財に指定されており、無形文化遺産として高い価値を認められています。



悪石島のボゼ